

乳腺外科研修プログラム

2024 年度版

【Ⅰ】 乳腺外科の診療と研修の概要

現在、乳癌は女性の悪性疾患の第1位です。9人に1人の女性が乳癌に罹患すると推計されています。すでに国民病とも言うべき乳癌ですが、当乳腺外科学講座はその最新医療を担うべく2007年春に開設されました。以来、多摩地区の乳癌診療に留まらず、国内外の臨床試験を推進するとともに、基礎医学と臨床医学を結ぶトランスレーショナルリサーチを展開しています。そこで、研修医の皆さんが乳癌に興味を抱いて学んでいただけるように、乳腺疾患の画像診断・手術・病理診断・薬物療法の基礎について修得していただきます。

乳腺外科では、手術手技だけでなく、薬物療法をはじめた内科的治療、放射線治療学、病理学、婦人科学、形成外科学、遺伝学など、将来医師として必要な知識を幅広く習得することができます。手術では、研修医の先生方が積極的に第一助手や術者を経験できるような機会を設けております。将来、乳腺外科に進むかどうかに関わらず、当科での研修を通して、一度は外科医を経験してもらいたいと考えています。当科は外科系の中でも比較的手術時間も短く、当直もないため、体力に自信がない先生でも遠慮なくご相談下さい。

スタッフ一同、アットホームな雰囲気先生方が研修にいらして頂けることを心よりお待ちしております。

【Ⅱ】 研修期間

当科は4週間の研修期間に対応しています。

【Ⅲ】 研修目標

A. 医師としての基本的価値観(プロフェッショナリズム)

1. 社会的使命と 公衆衛生への寄与

社会的使命を自覚し、説明責任を果たしつつ、限りある資源や社会の変遷に配慮した公正な医療の提供及び公衆衛生の向上に努める。

2. 利他的な態度

患者の苦痛や不安の軽減と福利の向上を最優先し、患者の価値観や自己決定権を尊重する。

3. 人間性の尊重

患者や家族の多様な価値観、感情、知識に配慮し、尊敬の念と思いやりの心を持って接する。

4. 自らを高める姿勢

自らの言動及び医療の内容を省察し、常に資質・能力の向上に努める。

5. 社会人としての常識と研修態度

社会人としての常識を身につけ、指導者の指示に従って積極的に研修を行うことにより、院内での自らの責任を果たす。

B. 医師としての資質・能力

1～6, 8, 9 は、プログラム全体に共通する目標のうち、当科において研修可能なものを示す。また、10 には当科に特有の目標を示す。

1. 医学・医療における倫理性

診療、研究、教育に関する倫理的な問題を認識し、適切に行動する。

- ① 人間の尊厳を守り、生命の不可侵性を尊重する。
- ② 患者のプライバシーに配慮し、守秘義務を果たす。
- ③ 倫理的ジレンマを認識し、相互尊重に基づき対応する。
- ④ 利益相反を認識し、管理方針に準拠して対応する。
- ⑤ 診療、研究、教育の透明性を確保し、不正行為の防止に努める。

2. 医学知識と問題対応能力

最新の医学及び医療に関する知識を獲得し、自らが直面する診療上の問題について、科学的根拠に経験を加味して解決を図る。

- ① 頻度の高い症候について、適切な臨床推論のプロセスを経て、鑑別診断と初期対応を行う。
- ② 患者情報を収集し、最新の医学的知見に基づいて、患者の意向や生活の質に配慮した臨床決断を行う。
- ③ 保健・医療・福祉の各側面に配慮した診療計画を立案し、実行する。

3. 診療技能と患者ケア

臨床技能を磨き、患者の苦痛や不安、考え・意向に配慮した診療を行う。

- ① 患者の健康状態に関する情報を、心理・社会的側面を含めて、効果的かつ安全に収集する。
- ② 患者の状態に合わせた、最適な治療を安全に実施する。
- ③ 診療内容とその根拠に関する医療記録や文書を、適切かつ遅滞なく作成する。

上記の目標を達成するために、以下の臨床手技の修得*を必須とする(当科で研修が可能なもの)。

医療面接(病歴聴取)
基本的な身体診察(婦人科の内診、眼球に直接触れる診察を除く)
採血法(静脈血、動脈血)
細菌培養の検体採取(耳漏、咽頭スワブ、体表の分泌液、血液、尿)
圧迫止血法
創部消毒とガーゼ交換
包帯法
簡単な切開・排膿
皮膚縫合法
局所麻酔法
注射法(皮内、皮下、筋肉、静脈確保)

*「修得」とは、指導医や上級医の直接の指導・監督下ではなく、単独または看護師等の介助の下で実施できるようになることを意味する。ただし、小児や協力の得られない患者での単独実施まで求めるものではない。

4. コミュニケーション能力

患者の心理・社会的背景を踏まえて、患者や家族と良好な関係性を築く。

- ① 適切な言葉遣い、礼儀正しい態度、身だしなみで患者や家族に接する。
- ② 患者や家族にとって必要な情報を整理し、分かりやすい言葉で説明して、患者の主体的

な意思決定を支援する。

- ③ 患者や家族のニーズを身体・心理・社会的側面から把握する。

5. チーム医療の実践

医療従事者をはじめ、患者や家族に関わる全ての人々の役割を理解し、連携を図る。

- ① 医療を提供する組織やチームの目的、チームの各構成員の役割を理解する。
- ② チームの各構成員と情報を共有し、連携を図る。

6. 医療の質と安全管理

患者にとって良質かつ安全な医療を提供し、医療従事者の安全性にも配慮する。

- ① 医療の質と患者安全の重要性を理解し、それらの評価・改善に努める。
- ② 日常業務の一環として、報告・連絡・相談を実践する。
- ③ 医療事故等の予防と事後の対応を行う。
- ④ 医療従事者の健康管理(予防接種や針刺し事故への対応を含む)を理解し、自らの健康管理に努める。

8. 科学的探究

医学及び医療における科学的アプローチを理解し、学術活動を通じて、医学及び医療の発展に寄与する。

- ① 医療上の疑問点を研究課題に変換する。
- ② 科学的研究方法を理解し、活用する。
- ③ 臨床研究や治験の意義を理解し、協力する。

9. 生涯にわたって共に学ぶ姿勢

医療の質の向上のために省察し、他の医師・医療者と共に研鑽しながら、後進の育成にも携わり、生涯にわたって自律的に学び続ける。

- ① 急速に変化・発展する医学知識・技術の吸収に努める。
- ② 同僚、後輩、医師以外の医療職と互いに教え、学びあう。
- ③ 国内外の政策や医学及び医療の最新動向(薬剤耐性菌やゲノム医療等を含む)を把握する。

10. 当科に特有の目標

乳腺疾患の患者を診療する上で基本となる臨床能力を身につける。

- ① 乳腺疾患について理解する。
- ② 乳癌の触診所見、病態生理、標準治療と最新治療を理解する。
- ③ 乳腺の超音波検査やマンモグラフィの読影ができる。

C. 基本的診療業務

コンサルテーションや医療連携が可能な状況下で、以下の各領域において、単独で診療ができる。当科で研修可能な項目のみ示す。

1. 一般外来診療

頻度の高い症候・病態について、適切な臨床推論プロセスを経て診断・治療を行い、主な慢性疾患については継続診療ができる。

2. 病棟診療

急性期の患者を含む入院患者について、入院診療計画を作成し、患者の一般的・全身的な診療とケアを行い、地域連携に配慮した退院調整ができる。

3. 初期救急対応

緊急性の高い病態を有する患者の状態や緊急度を速やかに把握・診断し、必要時には応急処置や院内外の専門部門と連携ができる。

【Ⅳ】 研修方略

Ⅰ. 経験すべき症候および疾病・病態

研修目標を達成するために、以下の各項目を経験することを必須とする。

※経験すべき症候及び経験すべき疾病・病態の研修を行ったことの確認は、日常業務において作成する病歴要約に基づくこととし、病歴、身体所見、検査所見、アセスメント、プラン(診断、治療、教育)、考察等を含むこと。

〈経験すべき症候〉

外来又は病棟において、下記の症候を呈する患者について、病歴、身体所見、簡単な検査所見に基づく臨床推論と、病態を考慮した初期対応を行う。

経験できる可能性:○はほぼ全員経験可能、△はチャンスがあれば経験可能

項目	研修期間
	4 週
① ショック	△
② 体重減少・るい痩	△
③ 発疹	△
⑤ 発熱	△
⑬ 心停止	△
⑭ 呼吸困難	△
⑰ 嘔気・嘔吐	△
⑱ 腹痛	△
⑲ 便通異常(下痢・便秘)	△
⑳ 腰・背部痛	△
㉑ 関節痛	△
㉒ 運動麻痺・筋力低下	△
㉔ 排尿障害(尿失禁・排尿困難)	△
㉕ 興奮・せん妄	△
㉖ 抑うつ	△
㉙ 終末期の症候	△

〈経験すべき疾病・病態〉

外来又は病棟において、下記の疾病・病態を有する患者の診療にあたる。

経験できる可能性:○はほぼ全員経験可能、△はチャンスがあれば経験可能

項目	研修期間
----	------

	4 週
⑦ 高血圧	△
⑨ 急性上気道炎	△
⑩ 気管支喘息	△
⑫ 急性胃腸炎	△
⑫ 糖尿病	△
⑬ 脂質異常症	△
⑭ うつ病	△

Ⅱ. 当科の研修で経験できる項目

研修目標 B-10 「当科に特有の目標」の達成に関連し、当科の研修で経験できる項目を示す。

経験できる可能性:○はほぼ全員経験可能、△はチャンスがあれば経験可能

項目	研修期間
	4 週
《臨床検査》	
乳腺超音波の読影	○
マンモグラフィ読影	○
穿刺吸引細胞診または針生検	△
《疾病・病態》	
良性乳腺疾患	△
乳癌	○
《経験できる可能性のある手術》	
乳癌手術(第 1 または第 2 助手)	○
乳房生検(第 1 または第 2 助手)	○
乳房生検(術者)	△
《臨床研究》	
症例の学会発表または論文作成	△

Ⅲ. 指導スタッフ

氏名	職位	略歴	専門領域
井本 滋	教授・診療科長	慶應義塾大学医学部卒	乳腺外科
関 大仁	講師・医局長・病棟医長	東邦大学医学部卒	乳腺外科
土屋 あい	任期制助教・外来医長	福井大学医学部卒	乳腺外科
矢尾 祥子	任期制助教	福井大学医学部卒	乳腺外科

Ⅳ. 診療体制

研修医は主治医を指導医としてチームを組み、診療・処置をともに行なう。

Ⅴ. 週間予定

	午前					午後				
	8	8:30	9	10	11	12	13	14	15	16 17
月	月曜ミーティング	回診	手術				手術			回診、抄読会・研究進捗報告会

火		回診	外来・病棟業務	検査	回診
水	教授回診	生検症例 カンファ	手術	手術	病理カンファ・回診
木		回診	外来・病棟業務	検査	回診
金		回診	外来・病棟業務	検査	回診
土			指定休		

VI. 研修の場所

病棟:S-3、S-8、HCU、SHCU

外来:乳腺外来(2階)、1・2次救急外来

カンファレンス:S-3 および病理カンファレンスルーム

VII. 研修医の業務と裁量の範囲

《日常の業務》

1. 入院患者について病歴を聴取し、診察を行い、カルテに記載する。
2. 朝と夕方に入院患者を回診する。
3. 定時採血は看護師が行うが、採血の手技に十分習熟するまでは研修医が行う。

《当直・休日出勤》

1. 宿直・当直業務はない。
2. 上級医からの特別な指示がない限り、休日は duty off とする。

《裁量の範囲》

1. 「修得を必とする臨床手技」(研修目標 B-3)の範囲内で、修得できたことを指導医が認めたものについては、指導医あるいは上級医の監督下でなく単独で行ってもよい。ただし、通常より難しい条件(全身状態が悪い、医療スタッフとの関係が良くない、1～2度試みたが失敗した、など)の患者の場合には、すみやかに指導医・上級医に相談する。
2. 指示は、必ず指導医・上級医のチェックを受けてからオーダーする。
3. 診療録の記載事項は、かならず指導医・上級医のチェックを受け、サインをもらう。

VIII. その他の教育活動

1. CPC やリスクマネジメント講習会などの院内講習会には、義務として積極的に出席すること。その間の業務は指導医・上級医が行う。
2. 症例報告などを希望する場合は、学会発表並びに論文作成の指導を受けることができる。
3. 乳癌に関連する学会等の会員および専門医の取得に関する説明を受けることができる。

【V】 研修評価

研修目標に挙げた各項目について、自己評価および指導医による評価を行う。なお、指導医が評価を行うために、多職種スタッフに意見を聞くことがある。

評価は「観察記録」、すなわち研修医の日頃の言動を評価者が観察し、要点を記録しておく方法により行い、特に試験などは行わない。研修終了時に診療科長が研修医と面談し、指導医の記載した評価票に基づいて講評を行う。また、評価票は卒後教育委員会に提出され、卒後教育委員会は定期的に研修医にフィードバックを行う。

上記以外に、研修目標達成状況や改善すべき点についてのフィードバック(形成的評価)は、随時行う。

【VI】 その他

研修に関する質問・要望がありましたら下記の臨床研修係に御連絡ください。

臨床研修係： 関 大仁

PHS 6867

Email hirohito.seki@ks.kyorin-u.ac.jp

※乳腺外科見学に関しまして

当科の手術日は毎週月曜日、水曜日となります。せっかく見学にいらして頂くので、是非、手術の助手を経験して頂き、少しでも乳がん治療の魅力をお伝えできればと考えております。特に乳房再建術(自家組織再建は水曜日のみ)は形成外科との合同手術のため日程が限られますので、見学をご希望の場合には、可能でしたら1か月以上先の日程でご相談頂けると助かります。